

月報 15

1980. 3. 23

*

報告すべきことが、まだいびのこっている気がする。もっとも、(月報とことさらに題名を冠していながらこう言うのもおかしいが)この紙面をなりたいさせる内容を「報告」とよんでしまうことには、こだわりがある。ぶつう報告という、もう済んでしまった事件を関心のある等三番にあとから伝達するだけというスタイルをとることをいみするのだけれうが、本当に重要なことは、決して済んでしまったことではないし、そうしたことのまゝでは、当事者とが第三番とかいう区別だてがいみをもつとは考えられないから。情報の送り手/受け手がすんなり分化するという既成観念に一本をゆするよりは、いたるところが現場であるという真実に目をひらいていよう。だからここでも、なにか中心から周辺へとむかう流れであったりするような伝達があるわけではない、ただ、できる限り普遍的なことをいま語るということがあるだけだ。

じぶんが現在、どこをどう通ってきてどこにいるのか、どこにむかっているのか——こういうことをいちばんよく知っているのがじぶんであると、言えるだろうか？ わたしなら断じてそう言ってしまう気がする。わたしのことをすみずみまでしりっくしているものが、このわたしのほかにあるものか、そう言える程度の自己省察を欠かすことのないようにしているつもりである。

だが少しも。誰もがこう自信たっぷりであるとするなら、そこに他者の立入る隙はなく、相互理解のための対話などおよそありえないことになるではないか？

誰にせよ、じぶんにはかわからないし、じぶん以外の人間にはうかがいしるすべもないようなことが、いろいろあるのはたしかだ。それにまた、ふだんからよく知りっくそうと唇にかけ、最大級のエネルギーを集中させているのが、ほかならぬこのじぶんに対してである、ということもある。このように、情報

量の点から言っても、また関心の度合という点から言っても、じぶんをじぶんがいちばんよくわかっているということは明らかで、いまだ疑問の余地など残らないようにみえる。それににもかかわらず、いっとうはじめに掲げられた問いがなお未解しいと感じられるとすると、それは、いまだどったような単純な発想から事態の全貌を尽くすことができない、ということではなからうか。なにか見落されているポイントがある。(もちろんひととはここで、フロイト流の抑圧機制の考え方をもちだして、他者によって暴露されない限りあきらまにならない自分の真実がまた隠されているのだ、と言いはることもできる。そういうこともあるのかしらないし、あ、これもかまわないが、話が枝葉にわたるべきやうだし、だいいちわたしはこの議論をあまり信用していないので、ここでの発想はとらないことにする。)

ひとか、じぶんでじぶんのことをとらえきれないようにおもい、誰か他のひとならじぶんについてもっとまじな見通しを与えてくれるかもしれないと考えしてしまう、ということがある。これは、当人の自己理解や分析が不徹底なためであるよりも、むしろ多くの場合、自己理解のなかに他者があらわれてくることへのいみを、きちんと見積ってない(とりちがえている)ためである、と解すべきであろう。自己理解という作業にどうしても欠けることになるのは、他者であること(じぶんでないこと)にもとづく、突きはなした端的な客観視である。他者であればいとやすやすとたてるそのような境位に、いざじぶんがおりたとうとするとは、まことの至難であり、ひとつの極限の境位においてかろうじて可能となるもののように望見されるにすぎない。ちょうど無限遠点がつけ加えられることにより、数直線がひとつの体系として閉じるように、自己理解を成就させるためにそこに求められるのは、じぶんのありえない一視点、極端な他性なのである。だから、具体的な他者がじぶんについてどういうことを知っているかというような事実関係は、自己理解の内容をより豊かなものとしてゆくべきで、本当はあまりたしにならない。(いかに示唆されようと、残念ながら、しょせんひととはじぶんが理解したことしか理解できないのである。)肝腎なのは、その具体的な他者が、ひとのなかに、じぶんとその前にさらけだすほかはなくなるような他性のまっかけをよびさまするかどうか、なのだ。これが、自己理解のなかにあらわれてくる他者の一般的ないみだと言っている。

誰でもこのような他者（他性）のまえにたつとき、まったくなすすべがないほど無かにされるだろう。なぜならこれこそ、じぶんの表現の繰出す辞書の全体にいつでも拮抗してしまうような、沈黙の敷しであるから。それは、ほんとうの他者であるよりさらに、じぶんの身体のなかでかたくなに黙してかたらぬ一部分、樂觀と悲観とのあいだを揺れる主観の座に対するもうひとつの、傍観の種である。どのような表現のいとなみも、本当に客観的なものの側に参画してゆくまえに、さしあたりいったんはかならずこのような黙せる他者（他性）に晒され、それを越えていくのでなければならぬ。そしてわたしが思うには、なにかある表現の大きさ、それがどれだけの他者（他性）を越えてきているかによって、すなわち、それが支配している沈黙の総量によって、測られるのである。だから表現者たらんとするものは、じぶんのなかになるべく大きな他者（他性）を構えわせて、日々それを糧と与え、いっそう大きく育てるようにならなければならない。既存の学説、技法、知識のたぐい、その他、そこからもたらされるもののすべては、こうした糧である。こうして膨れあがる、さしあたり沈黙とよんでおいたこの他者（他性）は、クロノスの如くに、濁きでようとする表現を片はしから呑みこみ、むさぼり喰らおうと待ちかまえている。一切の創造的な試みとは、この沈黙せる他性との、昼夜にわたる暗闘以外のものではない。じぶんの表現や行為のつらなりが、客観的にどのようないみを持ちはじめているのか、それをじぶんでみつめるうとする場合には、それがはたしてどれだけの大きさの沈黙（他性）をかいくぐって生きのびるのかを、試してみればよい。

さて、いま整理したようなことは、つね日頃それもがわきまえておけるはずのことである。そこでつぎに、これを下敷きにして、わたしの「記号空間論」の現在を自己評定してみよう。

たぶん「記号空間論」の仕事は、目下折るかえし点をすぎ、一連の課題をひとつの帰結へむかってどこまでもどこまでも絞りこんでゆくという段階に、ちょうどさしかかっているところだ、と言えるだろう。この時期のひとつの特徴は、作業完了までの具体的な段取りがおもい插かれはじめ、断片的な見通しのもとにおかれるようになる、ということである。折るかえし点にさしかかるま

では様子がちがっていた。2ヶ月先はおろか、一週間さきにじぶんが何を考へ何をしていることになるのかさえ、わたしじしん皆目見当もつかないというような場合に、あれやこれやの作業に没入していただのである。それに対していまは、全体が、できるだけの無駄のない簡潔なプラン、緊密な構成と文体のもとに整序されるということが、よりいっそう急顕におかれるようになった。

何よりわたしは、一冊の書物をうみだすことも企図して、この仕事を始めたのであった。そして書物とは、じっさいに印刷され、読者が手にとって頁を繰り、納得することのできるものでなければならぬ。こうした要請にこたえ、書物のなかに議論の本質だけをひと筋くっきりとのこすためには、じゅうぶんに精密な論理（論旨）構成を足場として組みあげておいたうえで、それ以外の不要な要素をすべてこそぎ落してしまうというだけの覚悟が必要である。たしかに、考えつめられた内容のものであればあるほど、記述が飛躍的に簡潔になるのはまちがいない。ゆなくとも記述の精度はじょじょに着くなるように、これまで作業をすすめてきたつもりであるけれども、もちろんこの程度ではまだテキストを編みだすに必要水準からはほど遠いのである。——こうして、現実の問題として作業完了の日程と見通しを与えなければならないわけであるがこれは要するに妥協をそこここにちりばめてゆくことにほかならないとも言えるのであって、存外にきつい手続きになりそうだ。

はじめわたしは、事態を軽く考えていたので、（というより、ことさら殆ど考えないようにはしていたためもあり）全体の作業に約2年でメドをつけられると目算していた。それから仕事のほうはまじめに続けたつもりだが、やがて、さいしょにわたしが考えていたような書物をうみだすというプランのためには、2年間ではとても足りるものではないということがはっきりしてきた。ここで目標を切り上げるといふおれの任方もあるのだろうが、それではいいいなにをしているのかわからない。

2年の予定ではじめた作業が3年にのび、4年がかりとなったからといって、そのこと自体別にどうということはない。ただ当然、付随して、解決しなければならぬことは出てくる。たとえば資金（と時間）の問題。はじめに予定のついでいた資金は2年分まで、昨年早々に底をついたから、その後しばらくは、

あちこちから借金をしてつないできた。金はあとあといくらも稼げるかしらな
いか。いまはなにふり時間が貴重、と考えたからである。その考えはいまも変
っていないけれども、そうとういつまでも続けられる芸当ではない。そこで思
案の末、10月から、鎌倉うちを昔ながらのアルバイトを始めることにした。ず
っと以前の経験から言って、手際よくこなせるつもりでいたのだが、蓋をあけ
てみると中学受験を間近に控えた小学生を繁盛し、いや、繁盛しすぎてしま
い、大極に目算が狂ってしまった。とにかく時間が寸断され、集中が図れない
ことおびたらしい。とくに12月には、ご存知のように、小室直樹さんが急に入
院するという騒ぎも重なって奔走せざるをえず、わたしの仕事のほうはずっか
りスローダウンすることになる。自分でえらんだ途とはいっても、こういう状
態では、いつまでも長くことかと心配になるのもいたし方ない。とにかくわた
しの仕事には、一定程度以上できるだけ沢山の時間を投入しないと、垢があか
ないのである。これでは定職についたほうが、はるかにましだったかもしれな
いではないか？ そんな折、ちょうど東洋文化研究所というところで助手若干名
を募集しているという記事が目につき、どんな職務内容ですかと問い合わせ
てみると、要するにスラスラしていればよいポストらしい。そこで、もしかした
らこれほうまい働き口ではないかとだんだんその気になり、公募なるものには
じめて応募してみた。結果、不採用と返事があったが、考えをみれば、数ある
応募者のなかからわたしのようによちがいで偉体のしれぬ研究者を拾いあげる
という理由もないのだから、無理もないことである。——そうこうするうち
に中学受験シーズンも終わったので、アルバイトのほうはぐんと整理したから、
事態はたいそう改善された。とうぶ人は仕事にうちこめる態勢がととのったと
思っている。またうまい公募の口でもあればともかく、目下はわたしの仕事を
どんどん先へすすめていくことだけに集中していよう。

せつかく「記号空間論」が折るかえし点に達してまた走りだそうという矢先
のこのもたつきがあったので、「お前このところスランパじゃないの」と心配
してくれる同僚がいたりで恐縮した。スランパか否かと言われれば、(定義の
仕方にもよるが)わざわざ教えてくれる人がいる位だからきつとそうに決まっ
ている。しかしわたしの本物の脚突き八丁は、とてもこんなものではない。二
れまぶったひとつの草稿にとりくむあいだにさえ、いくつも大きな波のうね

りがあるのが恒だった。すこし筆に詰まれば、口をきくのも億劫になり、か
か。このすこし筆がはかばかと、息をするのも忘れそうになった。しかるに、草
稿と書物とでは、木雷艇と巡洋戦艦ほどの開きがある。前途や廻るべし。しか
し、いまわたしは明澄な心境であって、どんな波風にももまれるつもりでいる。
転覆しないという保証は一切ないが、よしんばそうなったとて仕方がない、腹
をくくっていよう。(わたしを見送る困難など、じつは、まだまだたかかしれ
ている。)

しかし、曲りなりにもこう考えられるようになったのは、今回の曲折をすっ
かけに、わたしのなかにまだ曖昧な部分とそれをめぐる逡巡がのこっていたこ
とに気づき、その部分を剔出するようにつとめた結果である。それはとりも
ほおわず、それをあらたにじぶんのなかに他性として刻みつけ、自己理解をす
すめていく作業であった。

逡巡の内容というのは、こうであった——こんなことをしていい、社会学(界)
から縁を切られるようなことになってもかまわないのか？ これはむろん、
現に制度のようにしてある社会学(界)と、わたし及びわたしの作業との関係
が、じぶんでよく測れていなかったこと、あるいは、わたし及びわたしの作業
が最終的に社会学(界)から排斥されるかもしれないことを、いわれもなしに
怖れる気持ちがあったこと、のあらわれである。こうした曖昧さは、わたしのな
かに潜りこんでいる社会学(界)の既成概念からや、できている。そしてそれ
は、わたしの仕事がスローダウンしていようと、休みなく無定型的な増殖をつづ
けるようなものだ。わたしはそれを、わたしの表現のまにに立ちはだかる他者
(他性)として、じぶんのなかにはっきり見据えなければならぬ。

この土地の通常の知の政略をひとことでのべれば、たぶん「つぎつぎに飽え
こんでは小だしにし、ゆしがつ肥っていく」となる。それに対してわたしは、
書けば書くほどはじめての地点へ出てしまい、ますます吹きさらしの無一物に
なるとゆく、という気がしている。このちがいはなんだ?! もしこういうちが
いがあるなら、ひとが知識をみずからの資産のようにみなすところで、わたし
がそれをじぶんの負債(じぶんのなかの他者(他性))のようにかき立ててしま
う、ということにもとづく。わたしに言わせるなら、前者は、知の表現の最低限
の構造をもとえていない。つまり、知の擬態である。この土地は、未開の王

産をいままそのままだけで、しよせんはひとつと、びぶんが生きのびればよいという知の効用が制度にわたっている。魔態の王国であり、社会を徹底して解明しようとするような理性がもっとも生えてきにくい場所なのだ。(魔態については、別の折にまたふれるつもり。) こうした理性に真おける限り、わたしはこのころ全てを敵としなければならぬかもしれない。

さきの逡巡に対する、いまのわたしの見解と態度は、こうである——わたしと社会学(界)との関係がかりに絶たれるようになって、それが必然であるのなら、仕えたいのではないが。わたしには、制度としての社会学(界)と関わりをもつことよりも、この社会と直接対峙していくことのほうが、はるかに大切であり、基本的である。そうすることが、わたしが社会学者であるということである。いやむしろ、そのことにつきのような積極的な見込みを認めよう。社会学(界)がわたしをあえて外部とするというのであれば、わたしはそれを誘いをもつてひきうけよう。わたしは、わたしの仕事によって、かえって社会学(界)を圍繞すべき場所に出るのだ。制度としての社会学(界)は、ひとつの閉じた主観性としてふるまう限りで、その外をもつことができる。それゆえ、わたしは実質上社会学の内部で仕事をするが、その外部としてふるまうことにより、この主観性を攻撃し、破壊できることになる。それゆえ、わたしとわたしの仕事とが既存の社会(科)学(界)のどこに座標づけられるかではなく、わたしとわたしの仕事とがそのどんな外部を開示してみせるかに、じつはすべてが収斂してくるのである。

要するにいつかというとき、君らの社会学はまねごとにするべきではないかと断言できるのでなければならぬ。そのため、この土地に定住している、社会(科)学の発生期のあらゆる理性の活性を、わたしの仕事に花盛りしておこう。

以上が、ここしばらくわたるわたしの内面(もしあるとして)のドラマの暫定版で大仰な曝露である。こゝで作業の仕方やプランが且立って変わるとかどうとかいうことはないが、わたしの仕事の戦略的な見込みは、以前にもましていやがうえにもはっきりしてきたようだ。わたしはびぶんのなかにある他性をそれとして掌握し、そうして自己理解を一步すすめたのである。

ただ、思いがけずひとつもないだろうと思うが、ここまではこれのべたこと

によっても、当の「記号空間論」の作業がほんの1%でも前へすすんだというわけではないのである。(むしろ『月報』を書く手間だけ、確実に遅れたかもしれない!) 作業の成否はまったく今後にかかっている、困難の度合もだんだん大きくなっている。(「すべてを転べ」と急いでいる人のほうが、むしろ多いとうである。) 本当は作業プランの実際についても、ふれる筈であったが、もうずいぶん紙幅をつぶしてしまっただけで、これは別にまとめることにしようと思う。

* *

これもとくに報告しなければならぬことだったが、去年の秋口に、M氏の紹介もあって、K出版社のS氏と面会する機会があった。S氏は『ソシオロギス』3号のわたしの論文やその他の草稿をいくつか読んでいて、出版を勧めてくれたわけである。「社会学と関連する分野をまとまれば、それを一冊」という申し出であったから、既に先般がある旨の意をおし、ひとまず引受けた。あとで、さきに「月報」でのべたことのあるY社のM氏(注=5行上のM氏と別人)に連絡したところ、それではよろしいということなので、わたしはこゝで都合2冊、書きかけの本を抱えこんだことになる。各冊の内容とその関係については、考慮中であるが、おそらくY社の分を、「記号空間論」の原理的部分、K社の分を、この複本制空間を扱う部分、というふうにわりあるのが、もっとも現実的と思う。

* * *

今度新たに配れるようになったもの:

CN 98 「〈言語〉派行為論の基本構造(2) —失行症と行為の秩序—」

(『止揚』32号 所載 ¥500.-)

郵送によらない契約者で、『止揚』入替の方は、都度お申し出下さい。

HASHIZUME, Daisaburo : 5-9-11, Zaimokuza, Kamakura 248 JAPAN
Phone 0467-22-1030 YOKOHAMA 51782 CN 100 ¥20.-/8 pages